

## 腹部肥満の指標としての腹囲／腰囲指数

○松山容子\* 高部啓子\*\*

(\*大妻女大学家政, \*\*大妻女大短大)

【目的】近年健康志向の観点から中高年の肥満が問題とされ、人々の関心も高まっている。特に内臓に過剰な脂肪が沈着した腹部型肥満は、成人病と密接にかかわると指摘されている。この腹部型肥満を簡便にスクリーニングする手段のひとつとして、体表の周長である腰囲に対する腹囲の比を用い、男1.0以上、女0.8以上の者を腹部型肥満と判定するとよいと啓蒙書で提唱されている。本研究ではこの方法による腹部型肥満判定基準の妥当性を、日本人多数の計測データにより検証することを試みた。

【資料及び研究方法】資料は、1978～83年計測の工業技術院資料の20～50歳代男女、合計11,900例の、身長、体重、胸囲、胴囲、腹囲、腰囲、上腕最大囲、大腿最大囲、背部皮下脂肪厚、上腕部皮下脂肪厚の身体計測値10項目である。これらを用いて、身長と体重の組み合わせや推定体脂肪量による各種肥満判定法、及び周長間の指数を算出した。そして腹部型肥満の全身的な肥満との関連や出現頻度の性・年齢による変化を統計解析的手法を用いて検討した。

【結果】①腹囲／腰囲の平均値は男女ともに加齢とともに増加する。②腹囲／腰囲と各種肥満判定法による肥満度とは低いまたは無相関の関係にある。③腹囲／腰囲は、20歳代男で1.0以上となるのは、普通群の5名(0.3%)のみであり、一方50歳代女子では、全員が0.8以上となった。以上のことから腹囲／腰囲の値を適用し、男1.0、女0.8以上を一律に腹部型肥満と判定することには問題が多いと考えられる。